第三講　演習問題(3)

次の文章はともに『浜松中納言物語』の一節である。〔甲〕は、帝から皇女との結婚を持ちかけられていた中納言が、自らの意思を中将の内侍に伝える場面であり、〔乙〕は、中将の内侍がそれを帝に報告した直後の場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。

〔甲〕

めでたかるべきこと、いとあいなく思して、*月の行方たづねし中将の内侍は内の御方にもかけてさぶらふ人なれば、物語のついでに、「*唐土（もろこし）にてかしこかりし*相人（さうにん）どもの、『二十四、五、六過ぐさむことなむ、いみじうかたげなり』とあまた言ひし折に、みづからの心にも、昔より世にあるべき人は①かくはあらじものを、②すずろに心の浮かびたるやうⓐなるはと思ひわたりはべりしに、*相しおほせられぬる心地して、いみじうもの心細うおぼえはべれば、三、四、五年がほどは、行ひより他のことなくて試みむ、③そのほど過ぎなば、世にあるべきと思ひしづまりて、その折に、ともかくも身をば思ひ定めむ、と思ひはべりつつ、さるべき人々、内々*気色ばむことども多くはべれど、聞き過ぐしのみしはべるを、身に余るばかりか

しこき御気色を、限りなく承るも、それよりこなたは、さやうに馴れつかうまつらむも、いみじう憚(はばか)られ[A]はべれば、そのほどは*宮人になさせおはしまして、朝夕の宮仕へを怠らずつとめつかまつらむほどに、世にありなしの命の際は見えはべりなむかし」などのたまふを、限りなく思ひ定め給ふ[ⓑ]なる*海人(あま)の苫屋(とまや)より他のことは、また心あらじとなんめりかしと[④]心得るも、推し量り[⑤]心にくう、いかばかりものし給ふにかあらむ、世をそむき変はれる有様ながら、なほ横目せじとばかり、かたじけなき御ことをば省き捨て給ふめる[⑥]めざましさよ、とおぼえて、

いかなれや[⑦]浦島にのみ波かけて[⑧]高瀬の浜に寄らじとはする

と言ふを、うち笑ひて、まめやかに心細き身の憂(うれ)へを聞こゆれば、さもあさましうと恨みて、

[⑨]長浜や長き心を思ふまにあやぶみかくる波の高瀬を

など答へてあかれぬ。

〔乙〕

（帝は）このことを、「限りなきことと受け引き、思ふことのなきにこそあんなれ」と聞こし召すに、いと⑩けやけれど、「人聞きには、げに世に久しくさへえあらじと見ゆる人ぞかし。げにげに、⑪さもありぬべきことぞかし」と⑫おほやけしう仰せられなして、御心のうちには、年齢（としよはひ）、位の際も、まだ浅はかに軽々しうはおぼゆれど、ただ人柄のめでたきことばかりに、⑬かうてあるほどに、さやうにて位を高くなさむことは、わが心なり、と思し寄らせ給へるを、しかじかしぶしぶに思ふにては、［Ｉ］に召し寄すべきにてあらずと思し召しとどめさせ給ひて、*御裳着（もぎ）のことばかりをなほ急がせ給ひつつ、中納言のことは音なくⓒなりぬるを、中将の内侍[B]奏してけるなんめりと⑭心得て、*女君にも聞こえ知らせ[C]給ふ。⑮世に隠れなう、⑯ひがひがしと人々もどき[X]聞こゆなり、と聞き給ふことなれど、すべてよろづを聞き入れ、思ひ知り顔ならむも、今は似げなきことⓓなりと思し捨て果てて、ただ御行ひにのみ心を入れ給へり。*大将殿は、ひとへにめづらかⓔなりける人の御心かなと、⑰涙さへ落ちて思されけり。

（注）

＊月の行方たづねし中将の内侍…かつて中納言に「月の行く雲居をさして～」と歌を詠みかけたことのある女房。中宮付きであったが、帝のところにも伺候していた。
＊唐土…中国。中納言は中国に渡っていたことがある。
＊相人ども…人相などから運勢を占う者たち。
＊相しおほせられぬる心地…すべて言い当てられてしまった感じ。
＊気色ばむこと…縁談をほのめかすこと。
＊宮人…ここでは皇女に奉仕する人を意味する。
＊海人の苫屋…漁師の住む粗末な小屋の意であるが、「海人（あま）」には「尼」がかけられている。中納言はすでに出家をとげてしまった義妹に恋心を抱きつつ、夫のような立場で大切に世話をしていた。その義妹がここでいう「尼」である。
＊御裳着…女子が十二、三歳の頃に初めて裳を着ける儀式。成人になったしるしとして行われた。
＊女君…中納言の義妹にあたる尼。
＊大将殿…女君の実父。中納言の母の再婚相手にあたる。

問一　傍線部①「かくはあらじものを」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　二十代後半までは生きられないだろうに
ロ　中国で占い師に会おうとはしないだろうに
ハ　心が浮つくことはないだろうに
ニ　運命を言い当てられることはないだろうに
ホ　仏道修行のほかは何もしないだろうに

問二　傍線部②、⑤、⑥、⑩、⑯の意味として最も適当なものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選びなさい。

②「すずろに」

イ　どんな時でも　　ロ　徐々に　　ハ　なんとなく
ニ　ほんの少し　　ホ　生まれつき

⑤「心にくう」

イ　残念で　　ロ　心配で　　ハ　疑わしくて
ニ　頼もしくて　　ホ　心ひかれて

⑥「めざましさよ」

イ　慎み深いことよ　　ロ　気にくわないことよ
ハ　堂々としていることよ　　ニ　嫉妬深いことよ
ホ　たぐいまれであることよ

⑩「けやけけれど」

イ　はっきりしないけれど　　ロ　目に余るけれど
ハ　気の毒だけれど　　ニ　心細いけれど
ホ　理に適っているけれど

⑯「ひがひがし」

イ　うらやましい　　ロ　気どっている　　ハ　ひねくれている

ニ　卑怯だ　　ホ　献身的だ

問三　傍線部③「そのほど過ぎなば、世にあるべき」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜へから一つ選びなさい。

イ　その期間が過ぎないうちは、出世できないということがあろうか、そんなはずはない

ロ　その期間が過ぎたので、出世できるだろう

ハ　その期間が過ぎないので、出家するわけにはいかない

ニ　その期間が過ぎたなら、出家しなければならないのか

ホ　その期間が過ぎたなら、世の中で生きていけるだろう

へ　その期間が過ぎないうちは、世の中で生きていけないということがあろうか、そんなはずはない

問四　傍線部A「はべれ」、B「奏し」、C「給ふ」は誰に対する敬意を表しているか、最も適当なものを次のイ〜へからそれぞれ一つずつ選びなさい（同じ符号を何回用いてもよい）。

イ　中納言　　ロ　中将の内侍　　ハ　女君（中納言の義妹）

ニ　帝　　ホ　世間の人々　　へ　唐土の相人ども

A＝　　B＝　　C＝

問五　傍線部④「心得るも」、⑭「心得て」の主語として最も適当なものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選びなさい（同じ符号を何回用いてもよい）。

イ　中納言　　ロ　中将の内侍　　ハ　女君（中納言の義妹）
ニ　帝　　ホ　世間の人々

④＝　　⑭＝

問六　傍線部⑦「浦島」、⑧「高瀬の浜」はそれぞれ何を指しているか、その説明として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選びなさい。

イ「浦島」は相人による占いを指しており、「高瀬の浜」は男女の逢瀬を指している。
ロ「浦島」は長生きすることを指しており、「高瀬の浜」は宮仕えをすることを指している。
ハ「浦島」は数々の縁談を指しており、「高瀬の浜」は仏道修行を指している。
ニ「浦島」は中納言を指しており、「高瀬の浜」は中将の内侍を指している。
ホ「浦島」は中納言の義妹を指しており、「高瀬の浜」は皇女を指している。

問七　傍線部⑨「長浜や長き心を思ふまにあやぶみかくる波の高瀬を」という和歌についての説明として最も適当なものを次のイ〜ヘから一つ選びなさい。

イ　中納言が詠んだ和歌であり、予言の信憑性を中将の内侍に吟味してもらおうとする意図がこめられている。
ロ　中納言が詠んだ和歌であり、皇女に対する自分の忠誠心を疑う中将の内侍を責める意図がこめられている。
ハ　中納言が詠んだ和歌であり、結婚の決意が固まるまで待ってほしいと帝に懇願する意図がこめられている。
ニ　中将の内侍が詠んだ和歌であり、早くから中納言をひいきしてきた帝に反発する意図がこめられている。
ホ　中将の内侍が詠んだ和歌であり、不吉な予言を恐れ続ける中納言に同情する意図がこめられている。
ヘ　中将の内侍が詠んだ和歌であり、いつまでも尼に愛情を注ぐ中納言をあてこする意図がこめられている。

問八　傍線部⑪「さもありぬべきことぞかし」の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選びなさい。

イ　中納言が義妹のあとを追って出家しようとしているのは当然のなりゆきだ。
ロ　中納言がいつまでも良縁を断り続けるわけがないという世間の噂は信じてもよさそうだ。
ハ　中納言が皇女との身分差を気にするというのは無理もないことだ。
ニ　中納言があと数年で早死にするというのは確かにありそうなことだ。
ホ　中納言が近い将来出世に恵まれるというのは確かにありそうなことだ。

問九　傍線部⑫「おほやけしう仰せられなして」とあるが、これはどういうことを表しているか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　帝が世間でささやかれていた噂を公表して中納言への期待をさらにふくらませたということ
ロ　帝が朝廷を束ねる立場から臣下の中納言に対して公式に出家の許可を与えたということ
ハ　帝が中納言の言い分と中将の内侍の言い分とを聞き比べて公平な裁定を下したということ
ニ　帝が中納言を昇進させるつもりでいることを公的な場でわざわざ明らかにしたということ
ホ　帝が公式見解として中納言の言い分に同意することで縁談が流れたのを取りつくろったということ

問十　傍線部⑬「かうてあるほどに」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　自分がこうして帝位についているあいだに
ロ　自分がこうして死を覚悟しているあいだに
ハ　中納言がこれほど昇進を望んでいるのだから
ニ　中納言がこうして縁談を断ってきたのだから
ホ　世間の人々がこれほど注目しているのだから

問十一　空欄Ⅰに入る語として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　あながち　　ロ　うたてげ　　ハ　かたみ
ニ　たまさか　　ホ　つれづれ

問十二　傍線部⑮「世に隠れなう」とあるが、これと最も近い意味を表すものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　出る杭は打たれる
ロ　二の句が継げない
ハ　人の噂も七十五日
ニ　人の口に戸は立てられぬ
ホ　火のない所に煙は立たぬ

問十三　波線部X「聞こゆなり」の「なり」と文法上の分類や用法が最も近いものを波線部ⓐ～ⓔから一つ選びなさい。

ⓐ　浮かびたるやうなるは
ⓑ　思ひ定め給ふなる
ⓒ　音なくなりぬるを
ⓓ　似げなきことなり
ⓔ　めづらかなりける

問十四　傍線部⑰「涙さへ落ちて思されけり」とあるが、このときの大将の心情として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　世間の評判を無視して仏道に打ち込んでいる頑固な娘に対して、ほとほと困り果てている。
ロ　娘と義理の息子の関係に理解を示してくれた帝の恩情に対して、かたじけなく思っている。
ハ　尼になった娘を皇女よりも重んじてくれる義理の息子の誠実さに対して、ひたすら感謝している。
ニ　数年後には夫の代わりとなる後見人を失うおそれが生じた娘の運命を思って、ひどく胸を痛めている。
ホ　義理の息子が帝から特別に優遇されていることを知って、嬉しさと誇らしさで感極まっている。

第三講

〔模範解答〕

問一 ハ　**問二** ②ハ　⑤ホ　⑥ロ　⑩ロ　⑯ハ

問三 ホ　**問四** A ロ　B ニ　C イ　**問五** ④ロ　⑭イ

問六 ホ　**問七** ヘ　**問八** ニ　**問九** ホ　**問十** イ

問十一 イ　**問十二** ニ　**問十三** ⓑ　**問十四** ハ

〔現代語訳〕

〔甲〕

すばらしいはずのこと〔＝帝の皇女との結婚話〕が、（中納言は）たいそう気に入らないと思いなさって、かつて中納言に「月の行く雲居をさして〜」と歌を詠みかけたことのある女房である中将の内侍は帝のところにも伺候している人であるので、話のついでに、「中国で人相などから運勢を占うすぐれた者たちが、『二十四、五、六歳を過ごすようなことは、とても難しいようだ』とたくさん言われたときに、自分の内心でも、昔から世に生き長らえることができる人はこのようでもないだろうに〔＝心が浮つくことはないだろうに〕」、（自分は）なんとなく心が浮ついているようだなと思い続けてきましたので、すべて言い当てられてしまった感じがして、とてもどこか心細く思いましたので、三、四、五年の間は、仏道修行以外の他のことはしないようにしよう、その期間が過ぎたなら、世の中で生きていけるだろうと思って落ち着いて、その時に、何にせよ自分の身の振り方を思い定めよう、と思い続けていまして、しかるべき人々が、内々に縁談をほのめかすことが多くありますが、聞き流してばかりですので、身に余るほどの畏れ多いご意向を、この上なくお伺いするにつけても、その期間より前には、そのように妻に迎えてお仕え申し上げるようなことも、たいそう気が引けますので、その間は皇女に奉仕する人にさせなさって、朝夕の宮仕えを怠らず勤め申し上げるうちに、世に生きているかいないかの命の境目はきっと見えるでしょうよ」などおっしゃるので、

（中将の内侍が）この上なく思い定めなさるという海人の苫屋〔＝尼になった義妹〕以外の他のことは、まったく心にないつもりだというようなことだよと理解できるにつけても、推し量ると心ひかれて、（中納言の義妹は）どれほどでいらっしゃる方なのだろうか、出家した尼の姿なのに、それでもやはりわき目をふらないようにしようとばかり、恐れ多い（帝の皇女とのご結婚の）ことを軽視なさっているようなのは気にくわないことよ、と感じて、

いかなれや……＝どういうわけで浦島〔＝中納言の義妹〕にばかり（思いの）波を寄せて、高瀬の浜〔＝皇女〕には近寄らないようにしようとするのか

と言うのを、（中納言は）少し笑って、まじめに心細い身のつらさを申し上げたので、いかにも驚きあきれたことと恨んで、

長浜や……＝長浜のように（義妹を）長く思っているうちに、危うくしかねない、波の高瀬〔＝皇女〕（とのご縁）を

など答えて立ち去った。

〔乙〕

（帝は）このこと〔＝皇女との結婚話〕を、「（中納言は）この上ないことと受け入れ、（それ以外は）思うことがないようだ」と聞きなさったので、たいそう目に余るけれど、「人の噂では、本当に世に長くまで生きることができないだろうと見える人だよ。本当になるほど、きっとそうであるはずのことだよ〔＝中納言があと数年で早死にするというのは確かにありそうなことだ〕」と（中納言の言い分に同意することで縁談が流れたのを取りつくろうために）表立っておっしゃるようにして、お心のうちでは、（中納言は）年齢、位のほども、まだ低く軽々しくは思うが、ただ人柄がすばらしいことだけに、自分がこうして帝位についているあいだに、そのように（中納言を皇女と結婚させて）位を高くするようなことは、私の心次第である、と思いつきなさっているのに、このように（中納言は）気が進まないように思うので、強引に（婿として）召し寄せることはできないと思いとどめなさって、（皇女の）成人の儀式のことばかりをそれでもやはり準備なさっては、中納言のことは音沙汰なくなったので、（中納言は）中将の内侍が帝に（自分の気持ちを）申し上げなさったようだと理解して、義妹にあたる尼にも申し上げて知らせなさる。世間に隠せるわけもなく、（中納言のことを）ひねくれていると人々は非難申し上げるようだ、と（義妹は）聞きなさることであるが、まったくすべてを聞き入れ、承知している顔つきであるようなのも、（尼となっている）

今はふさわしくないことであると思いをすっかり捨てなさって、ただ仏道修行にばかり心を入れなさっている。大将殿〔＝義妹の実父〕は、（中納言は）ひたすら奇特である人の御心だなあと、涙まで流して感謝なさった。